

【組み合わせて使えることが「6つのルールと18の書き方」の大きな特徴】

「6つのルールと18の書き方」の特徴とは、それぞれの書き方を組み合わせて使えることです。組み合わせて書くことで内容を一層明確に伝えることができます。

【6つのルールと18の書き方】

ルール		書き方と内容	
ルール 1	冒頭を書く	書き方 1	要点を冒頭を書く
		書き方 2	全体像を冒頭を書く
		書き方 3	枠組みを冒頭を書く
ルール 2	ペアで書く	書き方 4	根拠を書く
		書き方 5	条件を書く
ルール 3	分けて書く	書き方 6	かたまりに分けて書く
		書き方 7	箇条書きで書く
		書き方 8	表で書く
ルール 4	視覚的に書く	書き方 9	写真や図を入れて書く
		書き方 10	強調して書く
		書き方 11	まとまりを持たせて書く
ルール 5	合わせて書く	書き方 12	組み合わせて書く
ルール 6	明確に伝わる文を書く	書き方 13	具体的な文を書く
		書き方 14	意味が明確な文を書く
		書き方 15	能動態の文を書く
		書き方 16	短い文を書く
		書き方 17	肯定文を書く
		書き方 18	文法を守って文を書く

■組み合わせの事例1

*書き方3（枠組みを冒頭に書く^{注1)}）、書き方1（要点を冒頭に書く）、書き方7（箇条書きで書く）および書き方10（強調して書く）を組み合わせた事例です。

注1)：枠組みとは、「目的・方針・手順」のことです。

【修正前 (Before)】

3. 対策工法選定の方針

現地状況に基づき、液状化対策工法選定の方針を立案する。

図○に示すように、施工箇所によって施工条件が異なる。そのため、施工箇所を図△に示すように2つの範囲に区分し、各々の施工範囲での液状化対策工法を選定する必要がある。そこで、範囲を区分して施工する。

また、今回の施工では、施工箇所近傍に交通量の多い国道○○号線がある。そのため、ここを通行する車両や歩道を利用する歩行者に対する安全確保が最も重要な施工条件である。したがって、通行車両や歩行者への安全を確保したうえで施工する。

【修正後 (After)】

3. 対策工法選定の方針^{注3)}

現地状況に基づき、液状化対策工法選定の方針を立案する。方針は以下の2項目である。

①施工範囲を区分する^{注2)}。

図○に示すように、施工箇所によって施工条件が異なる。そのため、施工箇所を図△に示すように2つの範囲に区分し、各々の施工範囲での液状化対策工法を選定する必要がある。

②通行車両や歩行者への安全を確保したうえで施工する。

今回の施工では、施工箇所近傍に交通量の多い国道○○号線がある。そのため、ここを通行する車両や歩道を利用する歩行者に対する安全確保が最も重要な施工条件である。

注2)：箇条書きで書いた①と②が「対策工法選定の方針」の要点です。箇条書きで要点を冒頭に書き、その下に要点の説明を書きました。

注3)：ゴシック体と明朝体の使い分けで内容を強調しました。

■組み合わせの事例2

*書き方6(かたまりに分け書く)、書き方7(箇条書きで書く)および書き方10(強調して書く)を組み合わせた事例です。

【修正前 (Before)】

歩行者と車による事故の防止対策には次のようなことがある。歩行者の側方通過時には徐行をすること、交通量を抑制すること(歩行者専用道路の設置など)、速度を抑制すること(ハンプや狭さくの設置など)、歩行者優先のルールを守ること、歩行空間などを確保すること(歩道の整備など)、生活道路では脇道からの人の飛び出しに注意することなどがある。

【修正後 (After)】

歩行者と車による事故の防止対策には次のようなことがある。

■行政側での対策^{注1)}

- ①交通量を抑制すること(歩行者専用道路の設置など)
- ②速度を抑制すること(ハンプや狭さくの設置など)
- ③歩行空間などを確保すること(歩道の整備など)

■ドライバー側での対策

- ①歩行者の側方通過時には徐行をすること
- ②歩行者優先のルールを守ること
- ③生活道路では脇道からの人の飛び出しに注意すること

注1): ゴシック体と明朝体の使い分けおよび記号(■)を付けて内容を強調しました。

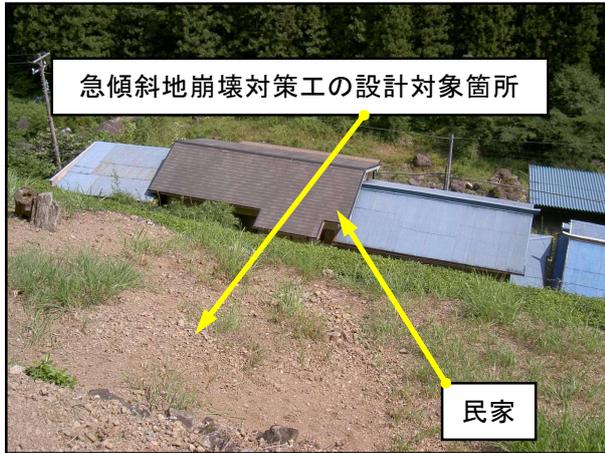
【参考】

書き方12(組み合わせで書く)は、「組み合わせで書くことで内容を一層明確に伝えることができる」という考え方に基づく書き方です(次頁参照:写真と表の組み合わせ)。

以 上

【現場状況写真】

写真①



写真②



写真③



表-1 設計上のポイント

写真番号	現場状況に基づく設計上のポイント
写真①	急傾斜地崩壊対策工として、現場状況から、鉄筋挿入工およびグラウンドアンカー工を計画する。
写真②	急傾斜地崩壊対策工を民家の背後で計画する。このとき、対策工と民家との離隔を1m以上確保する。
写真③	部分的に表層崩壊が発生しているため、急傾斜地崩壊対策工の施工に対しては、表層崩壊が進行しない施工手順を考える。